

太 田 誠

『品 質 と 価 格』

—新しい消費者の理論と計測—

(数量経済学選書 11)

創文社 1980. 12 iii+298 ページ

ワルラス的新古典派理論では、財の数を所与とし財の同質性を前提としているので、たとえば労働市場における賃金格差の存在はありえないことになる。しかしながら現在直接観測可能な資料において職種・性別・学歴・勤続年数等を統御しても産業別・規模別賃金格差が発生

している。この事実に対する1つの解釈としては、観測不可能な資料において同質性を保つほどには充分統御がなされていないためであるとする。このような解釈に立つと理論と資料との対応には膨大な細分化が必要となり現実には困難である。このような問題に対する画期的な理論として、本書では財の品質を陽表化し、その理論の実証分析結果を示した。本書における品質決定理論は、労働市場分析をはじめ、今日様々な分野でその必要性が認識され、その重大性が増大しているように思われる。たとえば、独占的競争理論において品質は所与ではなく広告等と共に非価格競争の重要な手段としての経済内生変数である。また他方産業組織論においても製品差別化の重要な原因は品質の相違であると言われている。また日本の産業連関表の中で、たとえば乗用車の輸出・輸入の貿易量を調べると輸出・輸入ともに実在し、貿易の特化は観測されない。つまり貿易論でも品質の分析が重要であることは言うまでもない。このように品質の経済分析が必要な分野は様々あるが、今まで体系的に財の品質および財の数の問題を理論化・実証化した例が見当たらない。本書はこれら様々な分野において品質の経済分析に関する数少ない教科書として今後しばしば参照されるであろう。

本書の構成は全5章からなりその内容を評者なりに簡単に要約すると以下ようになる。

第1章「伝統的品質理論」では、品質を所与とする従来の理論を著者は伝統的品質理論(品質与件モデル)と呼び、これに対し品質を選択変数とするような拡張をした理論(品質変数モデル)の諸性質を需要関数を例にし、スルツキー方程式を使って比較分析をしている。つまり従来の代替・所得効果に新たに品質変化効果加わる。すると代替・補完関係や下級財・ギッフェン財等の経済現象が従来の理論より容易で明確に説明できることが示されている。第2章「新しい消費者理論」では、副題が示しているように品質の経済分析に必要な新しい理論が示されている。伝統的な理論に対して何が新しいかを消費分析を例にして示すと、従来の理論では消費者の選好関数(効用関数)を財の消費量(および品質)の上に定義するが、新しい理論ではより根元的な諸欲求の充足水準の上に定義し(根元的効用関数)、諸欲求の充足水準は財の消費量に依存する(家計において諸欲求を生み出す生産活動は家計の生産とか消費活動とかいわれるので家計の生産関数と呼ぶ)と考える。このような新しい理論は大きく分けて2つの考え方がある。1つは、本書の実証分析の理論的基礎を与えた Lancaster に代表される理論で

あり、もう1つは消費者の非市場活動の分析に適している Becker や Muth に代表される家計の生産理論である。どちらも効用関数の直接的な変数は財の消費量ではなく根元的な諸欲求の充足水準であるとする考え方は共通であるが、本書の主題が品質にあるので、後者については相対的に簡単にふれられており従来の効用関数は、根元的効用関数と家計の生産関数との派生効用関数として理解できるという説明がなされている。根元的効用関数を定義する主な利点は、財の数や品質変化があっても安定することであり、欲求の数は財の数よりはるかに小さいために推定が容易である。このことが、従来の理論では新商品出現の消費者行動におよぼす影響が予測できなかったが、可能にする道を示した。さらに伝統的な理論で説明しにくい経済現象(ギッフェン財等)がより明確に説明可能であることを示している。第3章「品質と市場均衡、社会的最適性、規制」では財の数と品質とを内生変数とする市場均衡とその社会的最適性についての諸研究を整理している。この中で特に評者が関心を持った内容は、一般均衡分析における品質の決定理論である。つまり、この場合に市場均衡が一般的には社会的に最適ではなく、このことが各種の政策的な規制の問題に結びつくという理論展開に関心がある。つまりこのような分析視点による実証分析が今日非常に重要であることは言うまでもないからである。第4章「新しい消費者理論の応用 I: 乗用車市場の占有率の説明」では、資料の入手容易性と市場での代表性から乗用車市場の占有率の説明に、第2章で展開した新しい品質理論を応用した実証分析の結果と、外国為替相場の変動による市場占有率におよぼす影響をシミュレーションした結果が報告されている。品質の測定方法としては、乗用車の価格を諸特性(馬力、車内の面積等の物理的特性と、乗用車に対する評価のような質的成果変数)の上に回帰(ヘドニック回帰と呼ぶ)し、その残差が正であれば品質に比べて価格が高く付けられており市場占有率を低下させることになり、逆に品質に比べて価格が低く付けられており市場占有率は上昇すると考える方法である。つまりこの方法は、ヘドニック(特性)回帰の残差を通じて市場占有率と特性を結びつける間接的方法である。もう1つの方法は、市場占有率を価格と諸特性に直接的に結びつけるやり方であり、具体的には条件付ロジット分析を用いる。前者の間接的方法における残差は、測定し残された品質を反映しているかもしれないし、残差による市場占有率の説明には疑問がある等の欠点があるので、本書では後者の直接的方法によって分析している。結果は現実の市場占有率をよ

く説明できることを示している。ただ著者自身統計的な処理方法に問題点があることを認めておられるが、これらの改善を今後の研究に期待したい。第5章「新しい消費者理論の応用Ⅱ：ヘドニック価格指数」では、品質調整済み価格指数(品質を仮に一定に保ったときに得られる価格指数)を得る実際的方法としてヘドニック接近法の理論基礎を説明し、その方法によって諸特性が観測しやすい耐久財としてボイラー・発電機・乗用車についての実証分析の結果が報告されている。著者はヘドニック価格指数の諸特性を従来の価格指数論との関係で、手際よく整理し、その現実妥当性を検討している。特に公式のCPIで品質調整法として採用されている銘柄指定方式における諸欠点がヘドニック価格指数の採用によって免れるなどを強調し、公式のCPIに採用されるべき実地的な方式を提案している。この章の研究報告は著者の労作であり、学界を裨益すること大であると思われる。種々の仮説の検定についても用意周到であり様々な示唆を受けるが、ただ1点古くて新しい問題だが気付くことがある。それは諸特性間の多重共線性の処理方法である。経済分析には不可避の問題だが、現在回避する方法(完全決定法等)が開発されているので、是非今後の研究で検討されることを希望したい。

以上、簡単に本書の紹介を行なうとともに評者の気が付いた点を述べてきた。繰り返しになるが、本書は品質の経済分析という分野において新しい独創的な1つの方法を示した。このことはこれらの問題に直面し当惑している者にとって大変喜ばしいことである。財の品質問題に興味を持つ読者は是非一読されることをおすすめしたい。

[桜本 光]